

戦後70年

沖縄からの声

4月から八重瀬町に交流職員として出向している、田中葉生（たなか なお）です。

沖縄県八重瀬町に来て4カ月。八重瀬町と香南市の交流は、沖縄戦で亡くなった人の慰霊碑「土佐之塔」が深くかかわっています。

終戦70年を迎える今年、日本で唯一、地上戦が行われた沖縄から、戦争の被害に遭われた武村豊（たけむら とよ）さんの体験を基に当時を振り返り、平和について考えます。



沖縄戦の足跡

戦場となった南部

昭和16年から始まった太平洋戦争において、沖縄は国内で唯一、県民を総動員して地上戦が行われた場所です。昭和20年4月1日、米軍は沖縄本島中部に上陸しました。日本軍は米軍の上陸地点を沖



元白梅学徒隊の武村 豊さん（86歳）

縄県南部の八重瀬町港川海岸や糸満市海岸周辺と予想していたため、南部海岸を囲むように陣地を配備していました。

5月下旬、日本軍司令部は那覇市首里から撤退し、糸満市摩文仁まで南下しました。十数万人の一般住民が避難していた南部一帯は、日本軍の撤退作戦により避難民と敗走する日本兵が入り乱れる戦場となりました。

八重瀬町も戦場に

八重瀬町の名前の由来となつている「八重瀬岳」は、南部地上戦の最後の砦となつた山です。高さ163メートルの頂上を越えればすぐ、沖縄戦終焉の地と呼ばれる「摩文仁の丘」を望むことができ、戦時中はこの山に日本軍が駐軍していました。

当時この場所には、沖縄県立第二高等女学校の4年生が従軍看護助手「白梅学徒隊」として、軍の手伝いに従事していました。

白梅学徒隊として

今回、お話を聴かせていただいた白梅学徒隊出身の武村さんは当時16歳。八重瀬岳中腹にある自然洞窟を使った第24師団第一野戦病院に、昭和20年3月24日から6月まで配属されていました。この3カ月は梅雨の時期でし

当時を語る 武村豊さん

ふつうの女の子だったのに

米軍の攻撃の激化により、野戦病院の70床あった手術場も順番待ち。意識のある患者はイタイタイと叫び、麻酔薬もだんだん少なくなってきた。学徒生は患者に見つかると、治療の順番はまだか！と問われるので、患者から隠れながらの作業だった。

仕事は、学生であつたので雑用が主。し尿処理や艦砲射撃の銃創（じゅうそう）を洗う作業、食事の手伝いなど。ウジ虫が湧いている

だが、「一度もお風呂に入れなかつた」と振り返ります。足場は泥でぬかるみ、壕から降りる坂道は「死の坂」と言われていました。



▲当時のことを話していきたいと話す武村さん



沖縄本島

私にできること

戦後70年、子どもができ、ひ孫もできた。

今の私にできることは、できるだけ戦争を伝えていくことだと思った。



▲6月20日に開催されたピースウォーキングの様子



包帯を洗うなど、作業は夜、偵察の飛行機に隠れながら行った。戦争が始まるまでは那覇市の普通の16歳の女の子だった。従事する労働には大変抵抗を感じながら対応した。し尿を入れる瓶は広口のマヨネーズ瓶と呼ばれるもの。呼ばれて持つて行っても「遅い！沖縄の女の子は気がきかない」と怒られたり、やさしく「ありがとう、助かったよ」と言われる言葉に喜んだり、悲しんだりした。

思い出すのは臭い

汚物、尿、便、ロウソクのすすの臭い、嗅いだことのない臭いが充

満しており、最初は入り口で深く深呼吸して壕の中に入っていた。しかし、日々の業務に臭いの感覚がなくなっていた。

6月4日の解散命令

米軍の進攻により野戦病院が閉鎖することになり、白梅学徒隊は解散命令が言い渡された。しかし、どこに行けばよいかわからず、軍に連れて行くと断られてしまった。そこから地獄だった。

激戦下をさまよう

子どもを背負ったまま亡くなっている人を見た。水をくれと言ったまま亡く